みんぱくリポジトリ

モンゴルの春:人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2012-02-29
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小長谷, 有紀
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

第三日め(三月十八日)

しにとって、なにに意味があり、なにに意味がないか、まだわからないから、とりあえずあらゆること のなかにのこったのは、後足の一本が不自由なヒッジと三匹の子ヒッジ。 大きなメスウシ。乳が多くてのこるからしぼる、という。まもなく、ヒッジの群れが草原へ出発。石垣 ルだまりの部分がみあたらない。きのうの風でふきとばされ、こわれたのだろう。きのうよりさむい。 かれらと家畜とのかかわりが、きょうもまたはじまる。その一部始終をとりあえずかきとめる。 朝一番の仕事は、搾乳。分家のサラントヤーが、おととい出産したばかりのウシを搾乳した。五歳の 快晴の朝。大きなゲルのそばに温度計がころがっている。温度計のガラス管がわれている。アル

「なにをそんなにかいているんだね? そんなにかくことがあるかね?」

をかきとめる。メモをおわって、ノートをゲルの屋根の骨組み一本にさしこんだ。

しばしば父だけがのこっていた。 「なんということもないです。毎日の仕事をかいておくんです。なにがあったか、あとでわすれちゃい と父さんが声をかけてくる。父は午前中たいてい家のなかで横になっている。そうじのすんだ家に、

ますから」

「そんなことは、つまらない。もっと、おもしろいことをおしえてやろう」

「おまえはなにがききたいんだ?」

゙そうしてください。なんですか?」

「ううんと、いろんなこと。じゃあ七七年のゾドのこと」

どの家畜が死んだこと。あのときダンゼン一家はここまで南下してきて、それ以来ほとんど移動せずに おそろしい雪害があったこと。それを特別にトゥムル・ゾドすなわち「鉄の雪害」とよぶこと。 ゾドとは「雪害」を意味する。これまで、幾度か雪害のことに人びとは言及していた。一九七七年に

いること。断片的に言及されていた、その雪害。いったいどんな災害だったのだろうか。 「今年の春はおだやかだ。おまえはよい春にやってきた。しかし、毎年そうとはかぎらない……」

は、バヤンノール・ブリガード。約三百人が所属し、およそ三万頭の家畜がいた。雪害で生き残ったの そんなふうに、父さんは雪害の話をはじめた。一九七七年当時、牧業は集団化されていた。この付近

は二割たらず、二万頭のヒツジのうち三千頭。二千頭のウマのうち八十頭。四千頭のウシのうち五十頭。

という実例にもなっている。 さを想像するには十分である。雪害に対して、もっともよわいのがウシで、もっともつよいのがラクダ、 百三十頭のラクダのうち百十頭。それだけが生き残った。もちろん、あくまでも概数だが、災害の大き 般にモンゴルでは「さる年の雪害」といわれる。ほんとうにさる年に雪害が多いかどうかはわ

そして、一九七七年の雪害は、十二年に一度といういわば恒常的な雪害をはるかにしのぐスケールであ ない。ともかく、雪害は十二年に一度くらいの割合で発生するという経験則が、そこに表現されている。 った。人が一生に一度であうかどうか、というほどのものだった。へびの年の雪害だった。

被害にあったのはシリンゴル盟全域。ただちに援助の手がさしのべられた。陸上交通が遮断されてい

3 I

巳年の雪害

や薪材などの燃料である。やがて、家畜もふたたび配分された。そうした国家の援助がなければ、 るから、ヘリコプターが活躍した。救援物資が各戸にとどけられた。乾パンや乾麵などの食糧品と石炭

さんが、さらに話をくわえる。 雪害からたちなおることはできなかったろう。 父さんは、一家の主らしく、そんなふうに話をしめくくった。いつのまにか家にもどってきていた母

の組木の頭のところまで、雪がつもった。西風だった」 「前の年が、雨の多い秋だったんだよ。それが突然雪になったのさ。九月二十日(旧暦)ごろさね。壁

まだ秋なので、畜糞燃料を十分に用意していなかったのだ。もちろん、穀類もつきた。翌年の春までず べて、もはやだれの所有物でもない。そこで、死体の毛やたてがみをあつめて金持ちになったものもい っとくるしい。死んだ家畜の肉も食べざるをえない。いたるところに家畜の死体があった。それらはす つぎつぎとリアルなシーンがよびおこされてゆく。牧民のなかには、タンスをもやしたものもいた。

ので、死体は山のようにつもる。そこには今でも草がはえない。ラクダはつよい。南のケシクテンまで わずかにのこった木を、ウシが食べた。そして腹をこわして死んでいった。ウシはかさなりあって死ぬ る。骨や皮の収集作業に対して報奨金がでていた。西ウジムチンではゲルが雪でうまって死人もでた。 オトルにでかけて、ほとんど死ななかった。 オトルとは、家族をベースキャンプにのこし、放牧を担当する者だけが簡易テントで家畜をつれて別

当時、末息子のウネルバヤンがヒツジの放牧を担当していて、オトルにでかけた。彼もこのときのこと はわすれないという。彼の思い出話によれば……。 家畜をより安全な牧地へ誘導するのである。ラクダばかりでなく、ヒッジ・ヤギもオトルにでかけた。 の牧地へでかけることをいう。ここでいうオトルは、自然災害からの逃避行。通常の移動範囲をこえて、

設にあずけた。しかし、そこで飼育されて生き残ったのは約七百頭にすぎない。あずけなかった千頭を た。シリンホト市に約九千頭が到着した。そのうち大部分の八千頭を、町に臨時でもうけられた救援施 中数百頭も死んだ。群れからおくれるものは、どんどんみすでてすすんだ。男ばかり約二十人ででかけ た。すでに二万頭のうち、一万頭ちかくのヒッジが死んでいた。のこりの一万頭あまりで出発して、 じめた。この頃になると、自分の毛も食べる。飢えのせいだ。五十日あまりしてから、オトルに出発し 分で雪をほって草を食べることができた。やがて雪はかたくなり、こおった。四十日後、家畜が死には ふり、一メートルつもった。太陽のない日が五日つづいた。大吹雪だった。ふった時点では、家畜は自 マー、二頭といった程度だった。ブリガード(隊)の家畜群を放牧していた。七六年の十月、突然雪が まだ十六歳だった。集団化時代だから私有家畜は少ない。ヒツジとヤギが十五頭、ウシが五頭で、

いる。惨澹たる状況だったが、それでも、ソム(当時の人民公社)のなかではいちばん被害が少なかっ この話から計算すると、二万頭のヒッジは、父さんの目算よりもさらに少なく一千頭にまで減少して

が生き残った。五月にやっと雪がとけた。しばらくは一面が泥沼のようだった……。

つれてさらに南へすすみ、雪のすくない砂地のなかで放牧した。そこで二ヶ月半ほど滞在し、約三百頭

どの雪害がたとえふたたびおこっても、もう二度とあれほどの惨事にはいたるまい。 準備する。干し草もたっぷり用意する。自分で草を刈ることができなければ購入する。だから、あれほ

巳年の雪害

あれから十年。以来、人びとは用意周到に雪害にそなえている。畜糞を春のうちから収集して冬用に

つでも言及されるのは、そうした生き残りの家畜たちである。 いる家畜は少ない。そもそも、生き残ったものが少ないのだから。 十年前の雪害を記憶し、その経験をいかしている人びとは多い。 しかし、あのときのことをおぼえて 十年前の雪害が話題になるとき、

33



こっちと、つれまわした。ほかに代わるものがな ようと、ゾドの翌年からはもう利用しないことに 使されざるをえなかった役牛。その労苦にむくい たらかせた。それで決めた。ゾドの翌年から、 称は「ホクシン・チャガーン・シャル」。すなわ いから、頻繁に利用した。ほかのウシの分までは が、 っちゃいけないことにしたんだ」 たというほどの意味である。当時すでに成熟し ゾドのあと水くみなどによく利用した。あっ と母さん。「ふとった」という形容詞は、 と父さん。ゾドのあと生き残ったがゆえに、 ちがいない。 たのだから、現在かなりの年齢になっている 老いた、 そのゾド生き残り組であった。そいつの通 . 白い、去勢ウシ」というあだ名。 ダンゼン本家にいる老いた去勢ウ 成 5

決めたのである。自由な生き方があたえられた。 ゾドを生きぬいたたくましさは、こうして賞賛さ

き残ってきたのは、ふとった去勢ウシとメスの子

「ウシはゾドによわいからねえ。あのときから生

ウシだけさ」

ないウシ。いわば退役英雄なのである。 れることになった。この「老白牛」はもう二十歳をこえて、歯もない。老いてなお、屠殺されることも

乳の出が豊富で、オスのほりは毛が多い。いずれも利用する者にとって有利な特徴である。こうした身 用する年齢制限をとうにこえているからである。人が、敬意を表して、いのちをひきのばしているので 体的特徴をもつゆえに大切にしてきたとみなしてもよい。しかし、それだけでは説明できない。もう利 残り英雄をいままで屠殺することなく、餌まであたえて生かしつづけているのであった。メスのほうは る。この南家にはまた、英雄ヤギもいる。ゾドをのりこえた二頭のヤギ。赤い毛並のメス十一歳と、白 い毛並のオス十三歳。名前はあたえられていない。しかし、いのちがあたえられている。人びとは生き 当時、子ウシだったメスは「シリン・チャガーン」とよばれて、南家のチョルム姉さんのところに

であった。今年はどうやらおだやかな天候にめぐまれそうだ。父さんはそう予測している。その予測が あたればいいが……。居候としては、そうねがわずにはいられない。 のいれかわる春がきびしい。近年では、八五年、八六年とさむい年がつづいた。小規模ながら、雪害 人のそなえがいかに万全であろうとも、 モンゴル高原の自然はあいかわらずきびしい。とりわけ、気